

大学の世界展開力強化事業 取組実績 慶應義塾大学

【構想の名称】(タイプB-Ⅱ) グローバルエンジニア育成のための欧州理工系大学との連携プログラムの構築

【プログラムの目的・養成する人材像】

理工系高等教育における国際的な協同事業へ主体的に参画することで、多彩な教育プログラムを学生に提供し、言語や文化の違いを乗り越えてグローバルな感覚を持ち国際的に活躍するエンジニアの育成をめざす。

【構想の概要】

EU圏の理工系高等教育機関との連携により、グローバルな視野を持ち世界共通の問題解決へ向けて活動のできるエンジニアを育成する。修士課程におけるダブルディグリープログラムの展開、博士課程学生の共同指導を通じた国際的協同事業の展開、学部学生等に対する導入プログラムの提供ならびに予備課程の整備等を通じて、キャンパスにグローバルな感覚を醸成するような環境を整備することを目標とする。

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

○ 修士課程におけるダブルディグリープログラムの展開

2011年12月27日に高等電気学校Ecole Supérieure d'électricité (Supélec)とダブルディグリープログラムを締結し、プログラム拡大を果たした。また、協定校である欧州理工系大学(T.I.M.E. Association加盟大学)との相互教員派遣を行い、留学生受入面接の実施や担当者と授業の取組や留学生の受入体制に関して打合せを重ねたため、活発な学生交換に繋がった。

○ 博士課程学生の共同指導を通じた国際的協同事業の展開

世界著名大学へ教員及び学生を相互派遣し、双方の学生の共同指導を実施することにより、国際的に活躍する将来のインダストリーリーダー育成を目指す。また、今年度実施した共同指導をきっかけに、博士課程ダブルディグリー展開への議論が活発化し、また今後の欧州域外大学との協力関係構築への布石となるなど、複合的な成果が見られた。

〈授業風景〉



■ 実施した交流プログラムの概要、今後の開始に向けた準備状況

〈企業訪問風景〉



○ 学部生を対象とした導入プログラムの提供ならびに準備課程の整備

留学の準備課程として学部学生に対し、春休み期間を利用して複数の短期研修を用意し学生10名を派遣をした。また、次年度開講予定の学部1・2年生を対象に少人数体制の「国際人材育成セミナー」カリキュラムの完成へ向けて、教員4名を海外機関へ派遣し、国際的な教育の実態調査や国際人材育成セミナー夏期合宿での連携の可能性について議論した。

○ 協定校学生に対する日本留学紹介プログラムの実行

春休み期間に協定校との間で学生の相互訪問プログラムを実行し、次年度より夏季休暇期間に実施予定の日本語・日本文化研修を目的とした短期講座の紹介を行った。本講座では、日本語の学習履歴に応じた日本語指導と低学年学生向けの研究室体験セミナーを実施し、修士課程の進路としての日本留学を広報するものである。

■ 交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

修士課程DDプログラムによる派遣、博士課程学生の共同指導による派遣、学部学生を対象とした「グローバル人材に向けての学部教育システム」の一環で春季・夏季の海外研修、インターンシップ、サマースクール等の派遣を実施した。

○ 外国人留学生の受入れ

DDプログラム、サマースクール、博士課程学生の受け入れ、その他の研究研修プログラム等の実施を行った。

	H23	H24	H25	H26	H27
学生の派遣	53	100	120	180	200
学生の受入	85	100	115	130	150

■ 日本人学生の派遣・留学生の受入を促進するための環境整備

注)H23は実績、H24以降は計画。

○ 日本人学生の派遣のための環境整備

派遣前に先方での学習内容、語学の準備、渡航の手続き等に関して複数回のガイダンスを行うとともに、前年度以前の派遣学生から定期的に送られてくる月例報告書を開示し、多様な情報提供の機会を設ける。E-Learning教材を揃え、その進捗状況確認やアドバイスを専門指導員が行い、語学に関する学生の自主的勉学の環境を整えられている。

○ 外国人学生の受入れのための環境整備

世界標準的なカレンダーに合わせた9月入学・9月修了を取り入れるとともに種々の学内制度を用意し、留学生専門の学習指導教員をおくなど、日本語能力が科目履修のレベルに達しない留学生でも英語により不自由なく学生生活を送れる体制が整備されている。生活面においてはキャンパスから徒歩圏内に留学生寮、チューター制度等も整備されている。

■ 教育内容の可視化・成果の普及

○ 他大学への発展、相互交流について

本事業の中核をなす大学院修士課程でのダブルディグリー制度は、日本人学生の派遣において既設の修士課程に大幅な変更を加える必要がなく、日本と欧州の大学院教育における特質を相互補完的に利用することができる点で水平展開が容易に可能となる。また、留学生の受け入れにおいては、欧州とのアカデミックカレンダーとの相違を吸収すべく、9月入学・9月修了を可能とする必要があるが、研究活動に主眼がおかれたカリキュラムが組まれている限りにおいては、既設のプログラムへの変更は容易にできる。